

センターの管理運営における基本方針

1 コンセプト

**みんながクリエイティブになる。
そんな時代の中心になる。**

神戸で暮らす人や働く人。子どもや、若者や、大人たち。

そんなすべての人が集まり、話し、つぎつぎに何かを生みだしていく場所。

それがデザイン・クリエイティブセンター神戸です。

一部のアーティストやデザイナーだけでなく、

さまざまな人や世代が交流し、そこから生まれるアイデアや工夫で

新しい神戸をつくっていく。

その「実践」が積み重なれば、じぶんの街への愛着が増し、

街そのものにも個性が生まれ、やがては神戸の経済もより元気になっていく。

人がクリエイティブになること。街がクリエイティブになること。

この場所が、そのための中心地となること。

近い将来、日本や世界のまちづくりのお手本になるために、

神戸三宮の地で、新しい試みが動き始めています。

2 キャッチコピー

**ひと、まち、せかいの、センターになる。
デザイン・クリエイティブセンター神戸**

3 キーワード

「+クリエイティブ」

色や形といった一般的な「デザイン」「建築」などを付加させることによって、対象となる事業や活動の魅力を高め、コミュニケーション力を強化することはもちろん、その事業や活動そのものに、既成概念に一切捉われない「知恵」や「工夫」を取り入れ、それらが抱える問題や課題を解決したり、さらなる活性化を図るアプローチ手法が「+クリエイティブ」です。

4 4つの活動指針

1 「+クリエイティブ」の実践の場をつくる。(プロジェクトを起こす。)



「+クリエイティブ」という手法を実践する場(=プロジェクト)を次々に生み出していくことで、社会に対して「+クリエイティブ」の重要性と有効性をアピールすることができます。また、こうした実践の場には、市民、大学、行政、企業といった各セクターの人たちが垣根なく参加することができ、それぞれの知識や経験、情報などを持ち寄り、さらにそれぞれの“長所”を生かすことで、これまで単体のセクターだけでは解決困難だったプロジェクトの課題や障壁を解消し、より高い成果を実現することができます。

2 「+クリエイティブ」の担い手をつくる。



幅広い世代に対して、市民、大学、行政、企業といった各セクターの人たちに対して、「+クリエイティブ」の理念を理解し、その手法を展開できる担い手づくりを積極的に行います。子どもたちには「ちびっこうべ」というイベントでの体験を通じて創造的な学びの場を提供し、地域住民や学生、クリエイターをはじめとする社会人向けには「ゼミ」や「レクチャー」といった人材育成プログラムを通じて「+クリエイティブ」を実践的に学んでもらう場を提供し、さらに行政職員に対しては既存の研修プログラムとタイアップした普及啓発プログラムを展開します。

3 「+クリエイティブ」の輪を広げるための交流の場をつくる。



「+クリエイティブ」の理念を理解し、実践を積み重ねてきた人たち同士が刺激をし合い、新たなムーブメントを生みだすきっかけとなる“交流の場”を積極的に作り出します。具体的には、「Meets+DESIGN」という「食」と「デザイン」を融合させた交流パーティを定期的で開催し、「KIITalk」のような若手のクリエイターの発表の場や交流の場を展開するとともに、「ちびっこうべ」というクリエイティブをテーマにした祭りタイプのイベントを開催することで、センターに関わる様々なクリエイターや市民、学生、そして参加者である子どもたちがふれあい、「+クリエイティブ」の無限の可能性を共有する場を提供します。

4 「+クリエイティブ」な情報を発信し、ネットワークの構築を図る。



当センターが展開する様々な「+クリエイティブ」プロジェクトの成果を神戸市内で発信することで新たな担い手たちを集め、行政や企業の中から新たな事業パートナーを生み出します。そうした一連の流れの中から新たな事業が立ち上がり、好循環のサイクルの中で「+クリエイティブ」の輪が広がります。積み上げられた「+クリエイティブ」の成果は国内及び世界へと波及し、神戸は「+クリエイティブ」の分野における世界のトップランナーとしての地位を確立します。それを決定づけるプロジェクトが、「防災」「高齢化社会」をはじめとする社会的な課題をテーマにした国際展覧会(KOBEデザインの日記念イベント)です。

5 4つの活動方針が拡げる「+クリエイティブ」のムーブメント

「+クリエイティブ」をセンターで実践していくことで、新たな「+クリエイティブ」の担い手を育て、新たな人たちを取り込んでいく交流の場をつくることで、次なるムーブメントを起こしていく。3つの活動方針が有機的に重なり合い、「+クリエイティブ」の輪を広げていきます。そして、センターの活動を国内外に発信していくことで、共感する人たちがさらに集まり、新しいパートナーが生まれ、次なるアクションの種を生んでいくという好循環が生み出されます。

